

8月14日のウクライナ情報

安齋育郎

●7月のロシアの石油収入、昨年11月以降で最大に＝IEA(2023年8月11日)

ロシアの7月の原油や石油製品の輸出は、前月より25億ドル(3600億円)増え、153億ドル(2兆2100億円)に達した。これは158億ドル(2兆2800億円)だった昨年11月以降、最大となっている。国際エネルギー機関(IEA)が月次報告書で発表した。

IEAは報告書で、石油価格の上昇とロシア産石油の割引額の減少が相まって、石油輸出が増加したと指摘した。一方、エネルギー価格が記録的に高騰した昨年同月に比べると、41億ドル(5900億円)少なくなっている。

輸出量は日量730万バレルで、横ばいだった。内訳では原油の輸出が日量20万バレル減の460万バレルで、昨年12月以来最低となった。だが、270万バレルにまで伸びた石油関連製品の輸出が相殺し、総量では増減がなかった。

ロシアの原油生産量は日量5万バレル減り、日量940万バレルとなった。報告書では「ロシアは日量50万バレル以上の自主減産を行ったことになる」と指摘している。

ロシアは3月から日量50万バレルの自主減産を行っている。期限は数回延長され、現時点では来年12月末まで減産を維持することが決まっている。



●米国製「ブラッドレー」はウクライナ向け装備品の中で最もたくさん破壊されたものの1つ＝米メディア(2023年8月12日)

ウクライナは西側の同盟国から供与された戦闘車両を大量に失っており、これに西側の同盟国は失望している。米国製の歩兵戦闘車「ブラッドレー」は、ウクライナに提供された西側諸国の軍事装備品の中で最もたくさん破壊されているものの1つであることがわかった。サイト The Messenger のコラムニスト、ジョシュア・キーティング氏がその記事の中で指摘している。

ウクライナに供与された軍事装備品の状況

The Messengerによると、ロシアの特別軍事作戦が始まってから米政府はウクライナにすでに470億ドルの支援を行っているが、バイデン米大統領は最近この目的のために130億ドル超の追加予算を米議会に要請した。現時点で米国はウクライナに戦車「エイブラムス」、地対空ミサイルシステム「パトリオット」、高機動ロケット砲システム「ハイマース」などの米国製の最も強力な兵器や車両

を供与している。その多くがすでにロシア軍によって破壊された。

キーティング氏は、ある推定によるとウクライナ軍の反転攻勢で使われた兵器の 20%(西側兵器を多数含む)が、最初の 2 週間で損傷または破壊されたと指摘している。その後、ウクライナ軍は戦術を修正した。そして西側諸国は現在、ウクライナへの兵器供与に再び全力をつくすことになる可能性があるという。

軍事アナリストのフランツ＝ステファン・ガディ氏は The Messenger に対し、西側の同盟国は自分たちが提供した装備品がよりじょうずに使用されることを期待し、当初はウクライナ軍がうまく使いこなしていることに満足さえしていたと語った。一方、西側諸国は現在、ウクライナに供与した装備品が大量に失われていることに失望しているという。ガディ氏は「西側の複数の観察者は、ウクライナ軍が戦術技量を身に着け、他の部隊と協力してこれらの装備品を使いこなす能力を過大評価した」と考えている。

ウクライナは歩兵戦闘車「ブラッドレー」を急速に失っている

キーティング氏は、ウクライナ軍の反転攻勢で特に大きな打撃を受けた兵器の 1 つが米国製の歩兵戦闘車「ブラッドレー」だと指摘している。同氏によると、米国は「ブラッドレー」190 台をウクライナに提供することを約束し、7 月末時点でその約半数がウクライナ軍に引き渡されたと発表した。またキーティング氏は、ウクライナ軍の確認済みの損失に関するデータを引用し、少なくとも「ブラッドレー」23 台がすでに破壊され、21 台が損傷し、うち 5 台は兵士たちによって戦場に置き去りにされたと指摘している。

「装甲車『M113』60 台以上、対地雷・伏撃防護装甲車『マックスプロ』57 台、軍用貨物バン『ハンヴェー』100 台以上も破壊、損失または失われた。これらの破壊された装備品の総額は、おそらく数億ドルに上る」

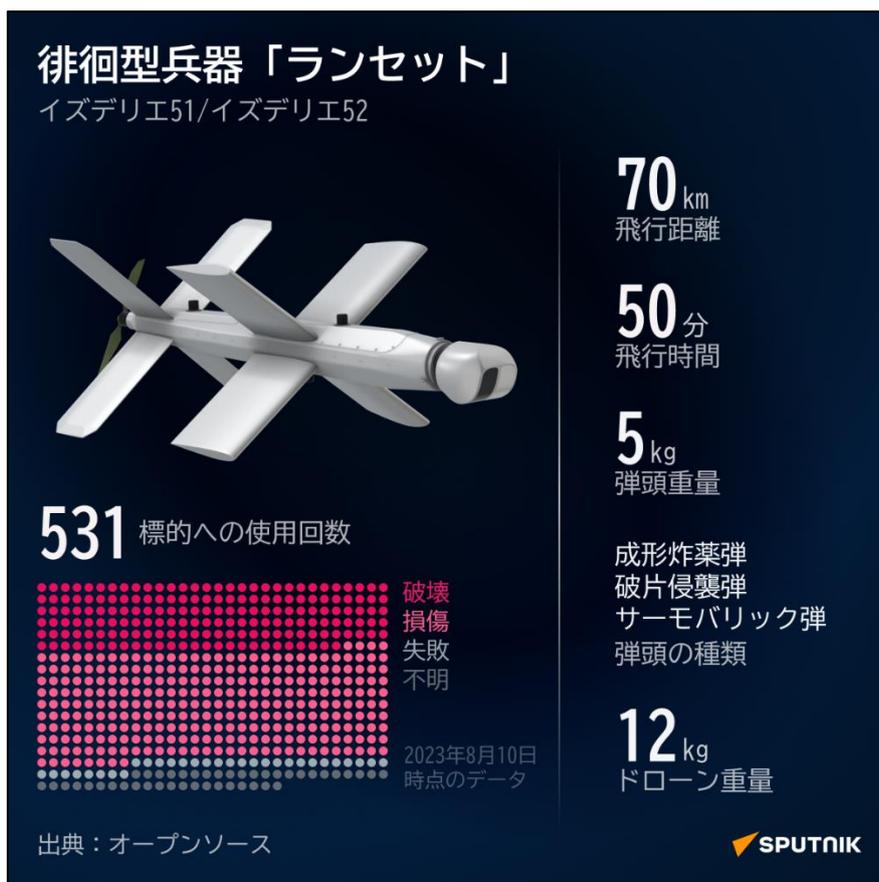
スプートニクは先に、ウクライナ軍は欧米から供与された軍事機器をあまりに多く失ったため、旧ソ連製戦車も使用せざるを得なくなっていると報じた。



●【図説】ロシアの神風ドローン 徘徊型兵器「ランセット」(2023 年 8 月 13 日)

ロシア軍が特別軍事作戦で使用する徘徊型兵器「ランセット」は、ウクライナ軍にとって主な脅威の一つと考えられている。このことは 7 月、ウクライナの国防相顧問が英テレグラフ紙からの取材で明ら

かにした。「ランセット」はその性能から、ロシアの「神風ドローン」とも称されるドローン。その性能と特徴を、スプートニクがインフォグラフィックでまとめた。



●【解説】ウクライナの防空システムはゼレンスキー氏が言うほど効果的なのか？ (2023年8月13日)

ウクライナのゼレンスキー大統領は自身のツイッターで、軍事支援の一環としてウクライナに供与された欧米の防空システム「パトリオット」と「IRIS-T」の戦術的・技術的特性を高く評価した。同氏によると、これらの「高い効果」を持つシステムはすでにロシアのさまざまな種類のミサイル 65 発とロシアの攻撃用無人機 178 機を撃墜した。しかし、実際はどのようなのだろうか？

軍事史学者で政治評論家のユーリー・クヌートフ氏はスプートニクのインタビューで、ウクライナにおける欧米の防空システムの実際の効果を理解するためには、ロシア軍がウクライナの軍事インフラに対してミサイルの「コンビネーション攻撃」を行っていることを考慮する必要があると語った。

コンビネーション攻撃とは何か？

クヌートフ氏によると、コンビネーション攻撃はまず、古くて「安価」なミサイルや無人機を使用した攻撃から始まる。それらを撃退するために、敵に欧米の「パトリオット」または「IRIS-T」の高価な迎撃ミサイルを発射させて、できるだけたくさんのミサイルを消費させる。そしてその後、攻撃の 2 段階目が始まる。「カリブル」や「イスカンドル」、「Kh-555」、「Kh-101」、「ランセット」などのロシアの最新のミサイルや無人機が、今度は狙いをつけたウクライナの目標に精密な攻撃を行う。なお、クヌートフ氏によると、米国製「パトリオット」もドイツ製「IRIS-T」もこの 2 段階目の攻撃を撃退することはできない。

問題は、防空システムの「効果」を何と考えるかにある

「ロシアのコンビネーション攻撃の過程で欧米の防空システムによって撃墜された目標の総数は、これらのシステムの高い効果を語るのに十分な数に見えるかもしれない。しかし、撃墜された装備の中で、敵を欺くための古いミサイルや無人機が最も大きな部分を占めていることを考慮し、実際に狙いを定めた目標に命中したユニットの数を数えた場合、北大西洋条約機構(NATO)の防空効果は極めて低いことが明らかになる」とクヌートフ氏は説明した。

ロシアは宣伝されている防空システムにどのように対処できるのか？

クヌートフ氏は、今月上旬にロシア国防省が同国の神風ドローン「ランセット 3」によって「IRIS-T」が破壊される動画を公開し、これについて米国側もすぐに報告したことや、5 月にはロシアの戦闘機 MiG-31 が発射した極超音速ミサイル「キンジャール」によるウクライナの「パトリオット」発射機 5 基の破壊が記録されたことに言及した。同氏によると、ロシアは「パトリオット」や「IRIS-T」にうまく対処することができ、極超音速ミサイル「イスカンドル M」や「カリブル」、「キンジャール」を使ってそれらを確信をもって動作不能にすることができる。同氏はその理由として、今日、欧米の防空システムの迎撃ミサイルは、ロシアのミサイルの飛行速度の半分も加速できないからだと強調している。

スプートニクは先に、ロシア軍の命中精度の高い攻撃でウクライナの対空防衛は危機的状態にあると報じた。



●独シュルツ首相は米国のノルドストリーム爆破計画を知っていた＝ハーシュ氏 (2023年8月13日)

ピューリッツァー賞受賞歴のある米調査報道記者のシーモア・ハーシュ氏は、プラットフォーム Substack に投稿した自身の記事の中で、ロシアとドイツを結ぶ天然ガスパイプライン「ノルドストリーム」に対して破壊工作を実行するという米国側の意向をドイツのシュルツ首相は知っていたと指摘した。また、「ノルドストリーム」の破壊はドイツ経済にマイナスの影響を与えたが、**シュルツ氏はこの決定に反対しなかった**という。

ハーシュ氏によると、昨年 2 月にシュルツ氏は「ノルドストリーム 2」の承認手続きを停止したが、そ

れまでにパイプラインにはドイツに送るためのガスが注入されていた。承認手続きの停止は、米国のバイデン大統領の強い要求によって受け入れられたという。

ハーシュ氏は、「ノルドストリーム」の破壊はドイツ経済にマイナスの影響を及ぼしたと強調し、ロシア産ガスの不足がエネルギー価格の上昇を引き起こし、経済成長そのものが減速したと指摘した。ドイツ国民は国内の経済危機に強い不満を抱いており、世論調査結果もそれを裏付けているという。

またハーシュ氏は、地元メディアは「家庭や企業の暖房代の補助金に関する国策をめぐる国内の政治闘争」について盛んに議論しているが、危機の主な原因である米国側による「ノルドストリーム」爆破は無視していると指摘している。

ハーシュ氏は先に、クリミア大橋への 2 度のテロ攻撃でバイデン米政権は致命的に重要な役割を演じたと発表していた。



●CIA は「ノルドストリーム」爆破テロへのウクライナの関与についてベルギーに通告していた＝メディア(2023 年 6 月 11 日)

ベルギーの主要メディアは 10 日、消息筋を引用し、米中央情報局(CIA)はロシアからドイツへ天然ガスを送るパイプライン「ノルドストリーム」爆破テロ事件後しばらくたってから、この攻撃にウクライナが関与した可能性についてベルギーに通告していたと報じた。

ベルギーの公共放送局 RTBF によると、2022 年 9 月末の「ノルドストリーム」に対する破壊工作後しばらくたってから、ベルギー軍情報機関に CIA から情報が送られてきた。この情報は、破壊工作にウクライナが関与した可能性に関するものだったという。

報道によると、この情報は、ベルギーを含む西側の情報機関が「欧州のエネルギーインフラに対する最も残忍かつ危険な攻撃の 1 つ」へのウクライナの関与を何か月も前から知っていたことを物語っている。

メディアは、「これはウクライナとの同盟に圧力をかける可能性がある」として、情報は開示されなかったと報じている。なお、ベルギーのジャーナリストらはこの件についてベルギー国防省から公式コメントを受け取ることができなかった。

スプートニク通信は先に、米国人ジャーナリストのシーモア・ハーシュ氏がスイスの日刊新聞「ノイエ・

チュルヒャー・ツァイトウング」からのインタビューに対し、ノルドストリームの爆破にロシアが関与という説は「あまりにも馬鹿げている」と述べたと報じた。



●クリミア大橋付近でウクライナのミサイル 2 発を撃墜＝ロシア国防省(2023 年 8 月 12 日)

ロシア国防省は 12 日、クリミア大橋付近で同日午後、攻撃型に改造されたウクライナの誘導ミサイル「S-200」2 発を防空システムが撃墜したと発表した。死傷者は被害はない。

ロシア国防省によると、現地時間 12 日午後 1 時ごろ、攻撃型に改造された対空誘導ミサイル S-200 でウクライナがクリミア大橋へのテロ攻撃を試みたが、ロシアの防空システムがウクライナのミサイルを適時に探知、迎撃した。死傷者は被害はない。

同省はその後、15 時ごろに同様のミサイルによる橋に対する 2 回目の攻撃が試みられたが、ミサイルは空中で迎撃されたと発表した。また同じく死傷者や被害はない。

ロシア外務省は、ウクライナがクリミア大橋への攻撃を試みたことを非難した。

「これは全くもって民間のインフラ施設であり、それに対する攻撃は容認できない。クリミアを攻撃するというキエフの試みに対抗手段を講じないわけにはいかない」

アクションノフ氏は自身の Telegram チャンネルで、平静を保ち、公式の情報源のみを信頼するよう求めた。

先に、橋付近の煙について報告されていた。クリミア首長顧問のクリュチコフ氏は自身の Telegram チャンネルで、この煙幕は特殊部隊によって張られたものであり、間もなく取り除かれると説明した。また、停止されていた車両の往来も近いうちに再開されるという。

ロシア南部のクリミア半島とクラスノダール地方を結ぶクリミア大橋(ケルチ海峡大橋)に対し、ウクライナはこれまでに 2 度のテロ攻撃を行っている。2023 年 7 月 17 日にかけての深夜、ウクライナの 2 機の水上型ドローンが橋を攻撃。このテロの結果、2 人が死亡、未成年者 1 人が負傷した。また 2022 年 10 月に実行された最初のテロでは、橋を走行中のトレーラーカーが爆発し、3 人が死亡した他、橋の 2 本の車道が部分的に損壊している。いずれのテロ攻撃でも狙われ、死亡したのは民間人だった。



●ウクライナ人が F16 に乗れるのは 1 年後 = 米マスコミ (2023 年 8 月 12 日)

米国の F16 戦闘機を切望しているウクライナだが、最初のウクライナ人パイロットらの養成がかりうじて終了するのは、来年の夏を待たなければならない。ワシントンポスト紙が消息筋からの情報として報じている。

ワシントンポスト紙のウクライナ人高官、軍人筋からの情報によれば、ウクライナが養成に送り込んだパイロットは現段階ではわずか 8 人。最初の訓練に行くのはそのうち 6 人でこれは飛行隊の半分のメンバーになる。あとの 2 人は補欠。

ワシントンポスト紙によれば、パイロットらはすでに英語を自由に操るようにはなったものの、まずは航空タームを覚えるための 4 か月にわたる語学研修を英国で受けなければならない。これに並行して陸上で戦う兵士らの訓練も行うよう、デンマークが強要している。ウクライナ人の役人らは、これも第 1 陣の 6 か月の戦闘準備の開始時期を 2024 年 1 月までしまったと考えている。オランダはデンマークとタンデムを組み、EU を代表してウクライナ人の F16 操縦訓練を行い、ルーマニアでの演習センターの創設に取り組んでいる。ワシントンポスト紙は、こうしたセンター創設もまたプロセスを「引き延ば」してしまっていると書いている。

ウクライナの欧州のパートナーらが他に抱える問題は、訓練を受けた専門家がないこと、トレーニング用の戦闘機がないこと、「空中戦の条件下で」飛行術を教えることができないこと。ウクライナ人高官らは、なぜ米国で訓練を行わないのかといぶかしがっている。米国には大勢のインストラクターがおり、アリゾナ州のルーク空軍基地だけをとっても毎年 400 人の F-16 用パイロットが養成されているからだ。

肝心なのは経験

軍事専門家でロシア政府付属金融大学のウラジーミル・エラノチャン助教授はスポーツニク・ラジオに出演した中で、ウクライナ人パイロットらは英語で飛行、操縦タームを学んだところで経験不足は補えないとする見解を表した。

「ロシア人の功労パイロットらが言うには、本当に役に立つ戦闘スキルを得るにはパイロットには最低でも 3 年はかかる。これはコックピットについての情報をものにする、レバー、インジケーターとか、何百もある装置の名称を、全部英語で覚えるとかいうことは一番大事な事ではないんです。肝心なの

は経験。離着陸だけではなく、コックピットにある正規武器の使い方だってそうです。だから普通、養成には何年もかかるわけなんです」

エラノチャン氏は、F16 に乗るのは最終的には欧米のパイロットになると見ている。



●「凍結に向かっている」 ベルギーの退役軍人の見るウクライナ紛争展開予測 (2023年8月11日)

ロシア軍の防衛線はウクライナ軍には難攻不落であることが明確になり、ウクライナに供与の NATO の軍事機器は非常な勢いで溶けている。ベルギーの退役軍人のロジェール・ハウゼン大將はビジネス紙 L' Echo からの取材でこの事実を認めた。ハウゼン氏はウクライナ紛争は決して楽観視できるものではなく、最良の結果を期待しても紛争の凍結だろうとの見方を表している。

ハウゼン氏の話によれば、**ウクライナ軍の反転攻勢開始後、最初の 1 週間だけで欧米が供与した戦車の 20% が失われた。**大損失を出したウクライナ軍は戦術を変え、今度はロシア軍の陣地へ集中砲撃をかけ、同時に歩兵隊による陣地突破に重きを置いた。

ハウゼン氏はこうした戦法の本質について、敵の防衛の欠損部を探すことにあると説明している。守りの弱い部分を見つけておき、攻撃の際に機械化部隊を投入するやり方だ。だがウクライナ軍は、未だにロシアの防衛線の一番外側でさえ突破できていない。ハウゼン氏によれば、ロシアの防衛線はところによっては 5 重にもなって築かれ、30-40 キロの深部まで守られているため、**反攻開始からウクライナ軍が取り返した領土はロシア軍が占める 500 分の 1 にも満たない。**

「今の争点は、双方のうちどちらが今の消耗戦の速度に持ちこたえることができるかだけだ」ハウゼン氏はこう語る。ハウゼン氏は L' Echo 紙に対して、ウクライナ軍が莫大な数の人員を失ったこと、またウクライナの砲兵隊が 1 日に消費する砲弾 8000 発は米国の軍需産業が 1 か月に製造する数量の 3 分の 1 にもあたることに注意を喚起した。**ハウゼン氏は 2023 年秋までには弾薬、ウクライナ軍の人員ともに不足する事態になると危惧している。**

しかもロシアの人口はウクライナの 2 倍、ロシア経済も実際は欧米が予想したようもはるかに堅牢だったことが明らかになった。加えて、ロシア軍には 2023 年の年頭から現在までに少なくとも 23 万人が新たに入隊している。ハウゼン氏はこれらをふまえた場合、**ロシアはあと 2, 3 年はこの状態を余裕で維持できるが、これに比べてウクライナは西側からの注入に完全に頼り切っており、注入する**

側の欧米はある瞬間、干からびる恐れがあると危惧感を表している。ハウゼン氏は、米国社会のウクライナ支援機運は目立って下降線をたどっており、しかも、欧米の軍需製造ポテンシャルは弱まっているという。「これらすべてを加味した場合、ウクライナの明日は安泰とは言い難い。良くて我々は現状維持か、紛争の凍結に向かって進むだろう。ただし、いずれの側かが決定的な勝利を収める時は2023年中にも2024年中にも来ない」

スポーツニクは、米国の軍事専門家らも特別軍事作戦におけるウクライナの勝利には疑問を呈しており、前線ではウクライナ軍の反転攻勢が失敗し、ロシアが主導権を握ったという共通の見解を持っていると報じている。



●英戦車「チャレンジャー2」、ウクライナで未だ目撃されず＝英国軍中佐(2023年8月13日)

英国は数か月前に同国の主力戦車「チャレンジャー2」をウクライナ軍に引き渡したが、これまでに「チャレンジャー2」は戦場で一度も目撃されていない。英国軍スチュアート・クロフォード中佐が英タブロイド紙デイリー・エクスプレスに寄稿した記事の中で指摘している。

同紙によると、当時、英国によるウクライナへの「チャレンジャー2」14両の提供は、他の西側諸国に自国の戦闘車両をウクライナ軍に供与するよう説得するのに役立った。それ以降、ウクライナ軍部隊にはドイツの主力戦車「レオパルト 2」や米国の歩兵戦闘車「ブラッドレー」をはじめとした北大西洋条約機構(NATO)の装甲戦闘車両が再装備された。西側からは、それぞれ約3000人の部隊からなる最大15個のウクライナの旅団に装備できるだけ十分な車両が供与された。

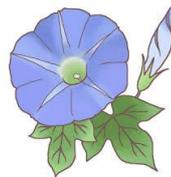
クロフォード氏によると、これら旅団の一部は戦闘に参加し、それは破壊されて燃えた「レオパルト」や「ブラッドレー」の多数の写真やビデオによって証明されているが、「チャレンジャー2」が戦場で使用された証拠は現時点ではない。同氏は、理論的に「チャレンジャー2」は前線で使用されたあと「生き残った」可能性もあるが、「チャレンジャー」は「レオパルト 2」と同じように地雷や攻撃用ドローンに対して脆弱であるため、その可能性は低いとの見方を示している。

クロフォード氏は、「チャレンジャー2」はまだ前線に投入されていない部隊に割り当てられたか、または輸送や訓練が原因でその展開が遅れている可能性があると考えている。またデイリー・エクスプレスによると、「チャレンジャー」はウクライナ軍の空挺兵団に配備された可能性があるほか、米国製の装甲車「ストライカー」やドイツ製の歩兵戦闘車「マルダー」が装備された部隊もまだ戦闘では確認され

ていない。

またクロフォード氏は、英国には「みじめ」な戦車が 134 両残っているが、これは欧州の軍事大国を目指す国にとっては少なすぎると指摘している。

英国防省は過去に、維持・改修が経済的に見合わないとして、ウクライナに供与できなかったはずの「チャレンジャー2」43 両を廃棄処分していた。



●黒海でウクライナ行き貨物船を臨検＝ロシア国防省(2023年8月13日)

モスクワ時間 13 日午前 6 時 40 分(日本時間午後 0 時 40 分)ごろ、露巡視船が黒海南西海域でウクライナのイズマイル港に向かうパラウ船籍の貨物船「スクラ・オカン」を発見した。貨物船は臨検のための停止命令を無視したため、巡視船は警告射撃した。

貨物船の臨検のために巡視船「ヴァシリー・バイコフ」からロシアの軍人らを乗せた軍用ヘリコプター「Ka-29」が発進した。船倉検査隊は貨物船の甲板に降下。貨物船は臨検終了後、再びイズマイル港に向かって出帆した。

ロシア国防省は、ロシア黒海艦隊は引き続き任務に指定された海域の警備を行っていくと報告を結んでいる。

7 月 19 日のロシア国防省の発表では、穀物合意の停止および海上の人道回廊の廃止後、日付が変わる 7 月 20 日の深夜からは、黒海を通り、ウクライナの港へ針路をとる船舶にはすべて軍事物資を積載し、ウクライナ側について紛争に加担している疑いがかけられる。ロシア外務省は国防省に引き続いて出した声明で、ウクライナの港に針路をとる船舶は軍事目的とみなされ、臨検の対象となると説明している。

ロシアは 7 月 17 日、「穀物合意」への参加を停止すると発表した。ロシア産の食料輸出解除に関する協定が、西側諸国による銀行決済、輸出船の保険適用などの制限によって履行されなかったためとしている。

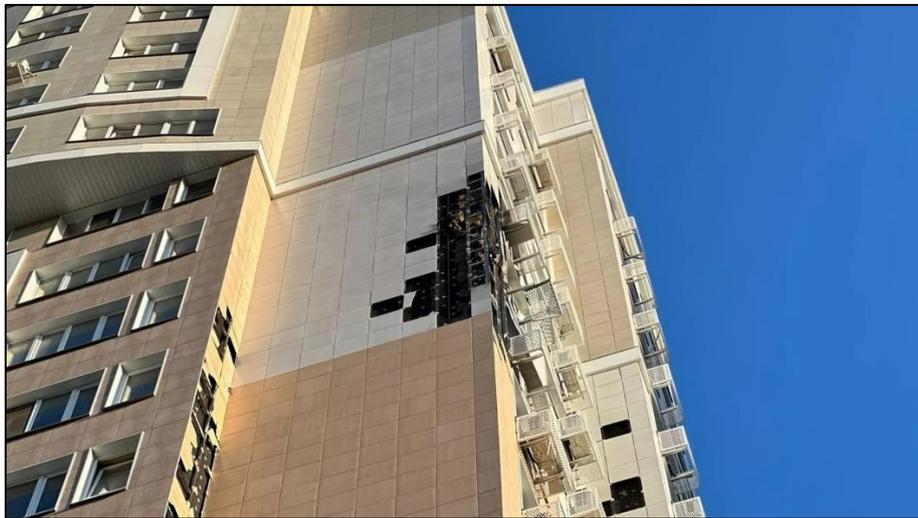


●ウクライナの無人機が露ベルゴロド市高層住宅を攻撃＝州知事(2023年8月14日)

ウクライナの無人機がロシアのベルゴロド市の高層住宅を攻撃し、爆発音が上がった。これにより、住宅の正面部分のタイル数枚が落下した。ベルゴロド州のヴァチェスラフ・グラドコフ知事が自身のSNS テレグラム・チャンネルを通じて明らかにした。

グラドコフ知事によれば、建物正面部分の7階から13階を覆う、通気システム用のタイルが落下した他、建物の大半のガラスが破損した。怪我人は出ていない。現場にはレスキュー隊が駆け付け、既に作業を開始している。

このほか、爆発した無人機の破片が落下し、住宅付近に駐車していた15台の車が損傷を受けた。



●ウクライナ 国境沿いの露クルスク州の村を砲撃 負傷者 3人＝州知事(2023年8月13日)

ウクライナが国境沿いの露クルスク州のヴォルフィノ村を砲撃した。同州のロマン・ストロヴォイト知事が自身のテレグラム・チャンネルを通じて発表した。これにより3人がミサイルの破片で負傷している。

ストロヴォイト知事によれば、村に撃ち込まれたミサイルは 10 発だったことが確認されている。そのうち 1 発は民家に落下した。負傷者全員に必要な医療支援が行われている。



●「見えて、聞こえる」独がウクライナに最新式偵察用ドローンを供与(2023年8月13日)

ドイツの防衛コンツェルン「ラインメタル」は 2023 年末までに最新型無人機 Luna NG をウクライナに供与する。独ビルド紙が報じた。

Luna NG の一式には地上で数機の制御ができるステーションとカタパルトが含まれている。

ビルド紙は Luna NG は「見えて、聞こえる」無人機だと強調している。NG は独語の Neue Generation (新世代) の略語です。すでにウクライナに供与された無人機の改良バージョン。通信の傍受、妨害が LTE の環境で行える他、最大飛行時間は 12 時間、高度は最大で 5000 メートルまで上げることができ、数百キロ先の偵察が行える。

ウクライナ軍にとって主な脅威のひとつとされている徘徊型兵器「ランセット」の性能について、スプートニクがまとめたインフォグラフィックは次の URL からお読みいただけます。

<https://sputniknews.jp/20230813/16780219.html>

